

イザナギとイザナミ 「古事記より」

二人 「はい、どうもー」

イザナギ（以下ギ） 「イザナギノミコトです」

イザナミ（以下ミ） 「イザナミノミコトです」

ミ「合わせてイザナミです」

ギ「いや、イザナミってひとりだけになっちゃったよ」

ミ「イザナギのイザが入ってるじゃない」

ギ「イザナギのイザが入ってるじゃないよ。端から見たらわかんないから」

ミ「まま、我々、普段は神様らしく地上界の皆様を見守ってますので」

ギ「ややこしい名前ですいませんね」

ミ「別にややこしくないわよ、イザナギイザナミなんて。（客に）え、イザナミって聞いた事あるよーってヒト、もしくは聞いた事ないよーってヒト、（手あげてもらっていいですか？）」

ギ「全員になっちゃうだろ、ま、確かに古事記にも出てきますけど」

ミ「確かに、乞食が出てきたと思ったらあんただったけど」

ギ「誰が乞食だよ、古事記ね。発音ひとつ間違うと、言っちゃいけないキーワードになっちゃうから」

ミ「ま、こういう細かくてめんどくさい方がイザナギ。私は女性ですから、イ・ザ・ナ・ミって名前の最後がナミだから女性っぽいでしょ」

ギ「まあまあ確かにね」

ミ「ですからこの際、ナミって呼んでくださいね♪」

ギ「急にキャバ嬢みたいになっちゃったな」

ミ「あなたは、イザナギでしょ、イザナギってほら、ね、皆さん、イザナギくんって、なんか、この角度から見たりすると、クサナギくんに似てるから・・似てるかあボケー！ 死ねよ！」

ギ「いや、あんたが言い出したんだよ！ そして口悪いなきなり」

ミ「ごめんごめん、けど実際、あんた似てるよ、クサナギくんのね、水虫に」

ギ「草剪君の水虫って何だよ」

ミ「水虫っていうのは、足白せんといって、はくせん菌が足の指や足の裏の皮膚を浸食することよ、」

ギ「水虫の細かい説明はいいんだよ」

ミ「要するにこれです！」（ナカムラアの顔をくいつと客の方に向ける）

ギ「何してんだよ」

ミ「触らないでよ、水虫！」

ギ「あんたがさわったんだろ」

ミ「ちよつと、私から25メートル距離おいて」

ギ「プールサイドの向こう側か、オレは」

ミ「・・・はあ？」（見下す感じ）

ギ「はあじゃねーよ！ 夫婦なんだから仲良くやろうよ」

ミ「夫婦ってあんた、天上界に降りてから夫婦になったけど、それまで兄と妹だったし近親相姦よ、人間界でいうと」

ギ「まま、そのあたりのタブーも含めて愛があったことに変わりないから。あの、今でも、いざなうって言葉あるでしょ、あれ、我々が語源ですから」

ミ「今の時代だと『イザ、なう』って使いますけどね」（携帯をいじるジェスチャーで）

ギ「Twitterみたいに言ってんじゃないよ」

ミ「何が、いざなう、なのよ。大体ねー、あんた裏切ったでしょ、私を！（客に）聞いてくださいよ、この水虫顔のヒト、私裏切ったんですよ」

ギ「何千年前の話だよ？ 裏切りとかじゃないでしょ、一緒に人間界つくったんだから。」

ミ「は？」

ギ「は？じゃなくて、天上界に色々神様いましてね。わたしら、高天原ってところで矛を渡されて掻き混ぜてごらんさいみたいな事言われたでしょ、」

ミ「あー、掻き混ぜたね地上界に矛垂らしてね、ねるねるねーるねって」

ギ「そんな掻き混ぜ方しないよ」

ミ「うん、やっぱりバナナチョコ味が最高」（※食べるジェスチャー）

ギ「いや本当にねるねるねるね作ってたんかい！ 違うでしょ！ 掻き混ぜて、矛の先っちょからボトって地上に垂れて、そこに島が出来たでしょ。それで地上界に降り立って、高天原から伸びた柱をぐるっと回って、こう結ばれたじゃない？はい、ぐるっと回って」

ミ「（バレリーナのように自分でターン）」

ギ「自分一人でターンするなよ。柱の周りぐるっと回ったでしょ（二人してぐるっと同じ奉公回って）一緒の方向グルグル回ったら、バターになっちゃうでしょう、チビクロサンボの虎か。逆に回って」

ギ「（ぐるっと周り出くわし）あら、こんなところに、美しい方」

ミ「あらこんなところに生ゴミ」

ギ「ゴミの日じゃねえわ！」

ミ「あの、聞いて欲しいの、進撃の巨人さん」

ギ「進撃の巨人じゃないけど、君の言うことなら何でも聞いてあげるよ」

ミ「ほんと！？ありがとう、奇行種」

ギ「だから進撃の巨人じゃねえわ」

ミ「私の身体は完璧に作られたはずなの。けどたったひとつだけ凹んだ場所があつて、これは一体何のための穴なんでしょう？」

ギ「なんて偶然なんだ。ボクの身体も完璧に作られてるけど」

ミ「嘘つけ！」

ギ「嘘じゃないよ」

ミ「まず顔がキモい！ キツい！ 臭い！」

ギ「まさに顔の3Kって、やかましいわ！」

ミ「顔がくるぶし」

ギ「顔がくるぶしってどういうことだよ」

ミ「合わせて4K」

ギ「テレビみたいに言うんじゃないよ、先進まないから、完璧なはずなのに、ただ一箇所だけ余ってる場所があるんだ。」

ミ「(怯えて) そ、それはもしかや、足と足の付け根の部分にあつて、なんか早くこすればこするほど血管が浮き出るぐらいギンギンになって」

ギ「卑猥だわ表現が！ 余ってる場所があるだけでいいでしょ」

ミ「え？何あなたの余ってる部分を、私の凹んだ部分に、ねじこみたい？ね、そんな事言われちゃったんです」

ギ「ままま」

ミ「ほんとにもう・断る！」 (急に殴る) 「

ギ「いや何も言っていないよ！ そして断っていないでしょ、オツケーしてくれただしょ」

ミ「やむをえずな」

ギ「でもせっかくドッキングして産まれた子は、手とか足とかない残念な子でね」

ミ「しよがないから船に乗せて流したんですよ」

ギ「これなんで、残念な子が産まれたかっていうと女から誘ったかららしくて。今は私から先にプロポーズし直したんです。そしたら、ちゃんとした子、産まれたんですよ」

ミ「そうもうお分かりですよね、淡路島の誕生です」

ギ「お分かりではないと思いますけど」

ミ「それから、四国、隠岐、九州、壱岐、対馬、佐渡、そして最後に本州。

ギ「子供作って作って作りまくりでした」

ミ「ヤリチンか！（蹴る）」

ギ「蹴るとこじゃないでしょ沢山国づくりするのが我々の使命だから」

ミ「これが後にビッグダディと呼ばれた男だった」

ギ「呼ばれてねーよ！ ま、とにかく全部で八つの島を生んだから日本の国は大八島（おおやしま）って呼ぶんですよ」

ミ「もうねこの人はただのビッグダディだからやればいいと思ってるんですけど。私大変でしたよ。子供産み過ぎて、お股、火について私死んじゃいましたから」

ギ「火が出るほどに燃え上がっちゃったからね」

ミ「いい風に言うな。私のオマタ燃えたのは、火の神を産んだ時でしょ。」

ギ「火之迦具土神（ひのかぐつちのかみ）ね」

ミ「（真顔で）オマタ大炎上なう」

ギ「そんなツイッターやってる余裕なくあなた死んじゃったでしょ」

ミ「もがき苦しんだ間もゲロ吐いて、ゲロから子供産んで、ウンコもらして、そつからも子供産みましたからね」

ギ「女の執念をみましたね、あの時な」

ミ「これ嘘みたいな事言ってますけどほんとの話ですからね。嘘だと思ったら見てやってください、乞食」

ギ「だから発音。古事記ね。色々登場人物でて来る歴史書の方ね」

ミ「まあ、私の死んだ後にどういうわけか出来た子たちはすくすく育ったみたいですけど」

ギ「つきをよむと書いて、月読（つくよみ）」

ミ「本気と書いてマジ」

ギ「どーでもいいよ。月読は夜の神様ね。それから太陽の神、」

ミ「生ハラミ大食いの神」

ギ「天照大御神だよ！何だ生ハラミ大食いの神って、お腹壊すわ！ で、その弟、ちよつとやんちゃな海の神様」

ミ「へソノオ」

ギ「スサノオな！ まあそんな神様が誕生しましたけど、その子たち出来るのはちよつと後ですから。それまで僕、独ぼっちっち」

ミ「水虫しか友達いないからね」

ギ「愛するイザナミが恋しくて、黄泉の国へ、つまり死んじゃったイザナミの住む世界に行ったんですよ、黄泉比良坂（よみつひらさか）という場所があります、そこが黄泉の世界と現世の境にある場所があります」

ギ「（演技がかって）はあ、はあ、ここから先が黄泉の国か、なんか緊張するな。だけど愛するイザナミに逢うためだ（ごくりと唾を呑む）よし、入ろう」

ミ「カランコロンカラン」

ギ「喫茶店みたいだな、おい。（歩く）あ、あの先に黄泉の国の扉が。（進んで、マイムの扉に）ドンドン！おい、イザナミ、いるのか！オレだ！わかるだろ、オレだよ」

ナミ「（ハツとして）もしかして、オレオレ詐欺！？」

ギ 「違うよ草薙君にめっぼう似てないと評判のイザナギくんだ。戻ってきてくれ。オレ一人じゃ国造りは出来ない」

ナミ「ごめんなさい、もうあなたの面白くないギャグに付き合いたくないの」

ギ 「そこはもうちよつと頑張るから」

ミ「それにこっちの世界の食べ物をお口にしてみました。だからもう戻れないのよ」

ナギ「そこをなんとか！僕の完璧なはず身体の中で有り余ってる一部をどうしていいかわからないんだ。何とかそっちの世界のおえらいさんに交渉してもらえないか？」

ミ「わかった。そこまで言うてくれるなら、クサナギくんが来てるって嘘ついて交渉してみるからちよつとこの扉の向こうで待ってて」

ギ「(客に) そう待ってろって言われまして、扉の外でずーっと待ってたんです、ですけど、うんともスンとも言わない」

ミ「うん・・スン・・」

ギ「いや、うんとかスンとかは言ってた！(扉に耳を当てるマイム) 中で何が行われてるんだ。ああ、気になる。開けちゃダメだって言われたけど、これ以上待てない・・開けるよ」

ミ「ウーーン」

ギ「自動ドアじゃないだろ、黄泉の国。」

ミ「(ドキつとして) は、あなた！どうしてこっちの世界に入ってきたの！？私の腐りかけた顔を戻してもらおうとアンチエイジングしてたのに！」

ギ「いや、まさかそんな変わり果てた姿になってるとは」

ミ「ぐうわく！」※襲いかかる

ギ「なんで襲うんだ、イザナミく俺のことを忘れてしまったのかー！」

ミ「いや、私はただのゾンビなんですけど」

ギ「イザナミじゃないんかい！関係ないただのゾンビ出てくんじゃねーよ。そこはイザナミ出てきてよ！」

ミ「ぐうわく！（※また襲う）」

ギ「うあく今度は本当のイザナミが襲ってきたー！」

ミ「顔がキモい！」※ひっぱたく

ギ「いや、ゾンビのあんたに言われたくないわ！」

ミ「キツイ！」※ひっぱたく

ミ「臭い！」※ひっぱたく

ミ「くるぶし」※ひっぱたく

ギ「いや、**ク**はもういいよー！」

ミ「暗い」※ひっぱたく

ミ「そもそも性格が無理」※ひっぱたく

ミ「えーっと、とにかく無理！」※ひっぱたく

ギ「ただの悪口じゃねーかよ！」

ミ「うがああああああ！（襲いかかる）」

ギ「(逃げる) うああ、まだ襲いかかってくるう。 (客に) で私慌てて逃げて、大きな岩で黄泉の国の出入口をふさいじやったんですよ、思わず」

ミ「あああ、小指が！ (挟まって痛がる)」

ギ「ごめん、小指挟んじゃって」

ミ「逢いに来てくれたんじゃないの！？なんたる仕打ち、もうこうなったら私、【ハダカの美奈子】っていう暴露本出すからね！」

ギ「だからビッグダディじゃないんだよ！」

ミ「これからあなたの国の人間をこっちの世界に引きずりこむからね、一日千人！」

ギ「あつそ、そっちがその気なら、こっちはな毎日、子供を誕生させてやる、一日千五百人！三日で4500人だ！ (客に) こうして、ヒトは毎日どこかで誰かが死んで、それ以上のヒトが毎日産まれる事になったとき」

ミ「こうして後に水前寺清子が三百六十五歩のマーチを産み出したとき」

ギ「三步進んで二歩下がってねえわ！ いい加減にしろ！」

ミ「どーも、ありがとうございましたー！」